

Once Upon a Dream

～いつか夢で～

長峰 千晶 (ながみね・ちあき)

ディズニー映画が大好きな私。今まで色んなディズニー映画を見てきたが、『眠れる森の美女』を見たのはこの授業が初めてだった。正直言って、映画を見るまではディズニープリンセスなどで見るオーロラ姫をあまり好かなかった。というのも、ディズニープリンセスのグッズでは彼女はルックス的にいい風にかかれていないと個人的には感じるからだ。これもあって映画を見る気にもならなかったのだ。

そのような印象を持ったまま授業で見ることになったのだが、その映画を初めて見たときの感動は今でも忘れられない。オーロラ姫への印象がガラッと変わった。きれいなブロンドヘア、バラ色の唇、美しい顔立ち、そして素晴らしい歌声。すごく好きになった。憧れた。ストーリー性も素敵で、王子様のキスで目覚めるという女の子誰もが憧れるシチュエーションなのだ。しかもオーロラ姫はその王子様のことを王子様と知らず、好きになり運命の人と思うというところがまたいい。そして同時に『眠れる森の美女』での悪者である妖精・マレフィセントが憎らしく感じた。

そしてその授業後知ったのだが、『眠れる森の美女』のリメイク版でその中では悪者であるマレフィセントが主人公になった映画『マレフィセント』が近日日本で公開されると。

『マレフィセント』公開日の2日後、私は気付けば妹を連れてポップコーンを片手にあべのアポロシネマにいた。そう、『マレフィセント』を見に来ていたのだ。

見て一言感想。「マレフィセント素敵すぎる。」この映画は原作『眠れる森の美女』とまた別のストーリーで成り立っていて、実はマレフィセントはオーロラ姫の味方であるのだ。これまたマレフィセントへの印象がガラッと変わってしまった。あんな強く邪悪に描かれていたマレフィセントが美しく優しく時には弱い一面を持つ女性だったのだ。彼女をあ的美丽なアンジェリーナ・ジョリーが演じており、あの迫力、口調、声のトーンを再現できるのは、アンジーしかいないと私は思う。まだ橋本賢二先生はみていらっやらないと思うので詳細は書きませんが、本当に見に行かないと後悔すると思います。

『眠れる森の美女』、『マレフィセント』の二つの映画を見て、それぞれの主人公であるオーロラ姫、マレフィセントが私の心の中に入ってきて、それまで抱いていた彼女らへの印象を彼女たち自身を変えてくれたのだ。見方を変えてみると物事は180度変わることがあると教えてくれました。

オーロラ姫とマレフィセントは全く反対の人間ですが、私はどちらにもなりたい。美しく優しい、強くたくましい女性を目指したい。

A decorative graphic with the text "Sleeping Beauty" in a stylized, serif font. The text is light blue and has a subtle glow effect. It is set against a dark purple rectangular background with rounded corners.

『マレフィセント』

～Another Story of *Sleeping Beauty*～

齋藤 遥 (さいとう・はるき)

【別次元のお話として】

『*Sleeping Beauty*』との比較として、『マレフィセント』を観に行った。つもりだったが、同じ日に母も観ていて、その夜の論争の末「『マレフィセント』はまた違うお話」という結論に至ったので、アナザーストーリーとして、しかし一本の「作品」として『マレフィセント』を追いかけていきたいと思う。

【1人映画デビュー】

友達を誘ってみたものの予定が合わず、時間もなかったので思い切って1人映画というものにチャレンジすることに。千葉でヒトカラの経験はあったけれど、1人映画……緊張。ただ、やってみると意外に簡単だった。チケット買う時と入場する時が少し恥ずかしかったぐらいで、その後はそれほど苦でもなく、だれにも干渉されることなく楽しめる。これはなかなか良い遊びを覚えた気がした（母は彼氏と観に行ったらしい。負けた気はしていない、していない）。

会場は八尾の映画館。水曜日の昼間ということもあって、大学生と思われる若者の姿と、「ああ、暇なんだなあ」と思うてしまうおばちゃんの姿が多かったように思う。ただ、隣に座ってきたのが浴衣のカップルで、彼女が終始彼氏にもたれかかっていたのは中々印象的で、これはぜひレポートに載せてやろうと、固く決意した。

【『マレフィセント』】

いざ『マレフィセント』の世界へ！もう、実写なのかCG映画なのかわからないぐらい、とにかく世界観が沢山の技術によって表されているなあ、という印象だった。どこまでネタバレさせていいのかわからないので深い内容についてはあまり語れないのだが、アンジェリーナ・ジョリーが演じるマレフィセントは、裏切りによって愛を信じられなくなり、それが憎しみに変わり、その勢いだけで呪いをかけてしまう。しかし、成長していくオーロラ姫をなんだかんだ見守るうちに……。

この映画、私が特に印象に残ったのは、オーロラ姫が自分には呪いがかかっていることと、呪いをかけたのは自分が慕っているゴッドマザー（マレフィセント）だったことを知った時のシーン。そして、呪いをかけたのは自分だということを認めた時の2人の心情。この2つだ。今までの愛情を裏切られたオーロラ姫と、深い後悔に襲われるマレフィセント。マレフィセントのセリフが少なく、顔の表情もあまり変わらずというこのシーンは、オーディエンスにあれこれ想像させるいい演出だったと思う。

映画の中では、3人の妖精たちは『*Sleeping Beauty*』程重要さはなく、妖精たちの役割はかなり少なくなっていた。また、王子様もほとんど出演せず、「マレフィセントとオーロラ姫とステファン、時々カラス」といった印象だった。

そしてその中でも特に注目したのは、アンジェリーナ・ジョリーではなく、オーロラ姫を演じたエル・ファニングという女優さんだ。彼女は、なんとオーロラ姫と同じく16歳、女優歴は14年！2

歳の時からこの仕事をしているという。第一印象は「めちゃくちゃ可愛い」。特に笑った顔がとにかく良い。この抜擢は本当にハマったと思う。その無垢な笑顔と、真実を知った時の悲しそうな顔、最後までゴッドマザーのために一役かったこと、そしてエンディングと、本作品の中に、彼女の良さがとにかく表れていたと思う。また、悲壮な雰囲気のマレフィセントが、無垢で明るいオーロラ姫との関わりを通して、幼い日のマレフィセントに良く似た雰囲気へと「戻っていく」ような流れもよかった。オーロラ姫が最後の木の兵隊を見たときの表情と、「あなたはカッコいいわ」と幼いマレフィセントが言った時の表情はどこか似ているなあとも思った。

このように、表情を読み取るのが好きな私にとって、今回の映画はその表情が本当によく出ていたなあという印象だった。『Sleeping Beauty』とはまた違う、アナザーストーリーとして観ると、また違う楽しさがある。もちろん、比較して観れる部分もたくさんあるので、予備知識として『Sleeping Beauty』を見ておくと、一層楽しめる。そんな映画だった。

【終わりに】

母との論争の中で、ステファン王がマレフィセントの翼に話しかけるシーンの話などもだが、今回は割愛させてもらった。もし観ていない人がいれば、ぜひ、そのシーンも注目して観てほしい。また、今回で新たな趣味が見つかった。またこれからも、たまに1人映画を試してみようと思う。ただ、浴衣のカップルだけはもう御免だ。



『マレフィセント』と『眠れる森の美女』を比較して

— 真実の愛はあるのか —

是澤 克秋 (これさわ・かつあき)

7月13日夕方、僕は友達とアンジェリーナ・ジョリー主演の『マレフィセント』**Maleficent**を難波のTOHOシネマズに観にいった。日本語字幕入りで3D映像のものを観た。日本語への訳しかたに感心することが何回かあった。公開したからまだ日が浅いためか、ほぼ映画館は満員だった。この映画は授業で観た『眠れる森の美女』**Sleeping Beauty**の実写版であったが、映画の中では多くのCGも使われていて、非常に迫力があつた。

『眠れる森の美女』は授業で観たのが初めてだった。その内容はかなり楽しめるものであつた。それを観た上で『マレフィセント』を観たのだが、『眠れる森の美女』を見ていたことでたくさん比較しながら観ることができたため、倍楽しめたように思う。『眠れる森の美女』ではマレフィセントが非情な魔女のように描かれていた。また、マレフィセントの登場回数が少なかった。『マレフィセント』ではマレフィセントのオーロラ姫に対する愛情が描かれていた。また、題名になっていることもあつてか、マレフィセントの登場シーンが多く、彼女がオーロラ姫の成長を見届け、徐々に愛情を深めていく描写が多かつた。マレフィセントとオーロラ姫が母と娘のように見えたりもした。最後の結末も大きく違つていて、とても面白かつた。

『マレフィセント』ではCGが多く使われていて、マレフィセントの味方である妖精がとても細かく描かれていた。また、戦闘シーンはとても迫力のあるものになつていた。戦闘シーンは『眠れる森の美女』に比べてかなり多く、CGの影響もあり映画自体がかなりダイナミックなものに仕上がつていたように思う。

マレフィセントがオーロラ姫生誕祝い場で、オーロラ姫に呪いをかけ、「真実の愛のみがこの呪いをやぶれる」といったようなことを言つていた。このセリフを聞いたときはマレフィセントが少し優しさを見せたのだと思つていたが、マレフィセントはフィリップ王子との失恋が原因で真実の愛など存在しないと考え、そのセリフを吐いていたのだと知つたときは本当に驚いた。しかし最後、真実の愛を見つけることができたのだが、そのシーンでは心動かされた。

終盤、話は『眠れる森の美女』とは大きく異なつた方向に傾き、容易に結末が想像できるハッピーエンドの話ではなかつた。しかしとても納得のいく形で締めくくられていて、心温まる映画に仕上がつていたと思う。

最後に、ディアヴァル(マレフィセントの手下で、魔法で人間や犬(狼?)、ドラゴン等の他の動物の姿に変えられたカラス)を演じていたサム・ライリー(1980~)という俳優がとてもかっこよかつた。俳優になる人はかなり容姿が優れている人が多いイメージがあるが、彼は今まで見てきた俳優の中で五本の指に入るほどかっこよかつた。今後彼の出演する映画にも注目していきたい。

『MALEFICENT』

～The Secret of the True Love Kiss～

仲新城 直樹 (なかしんじょう・なおき)

私は公開された週の土曜に友人とこの『マレフィセント』を観に行った。週末ということもあってか映画館は満員だった。内容としては誰もが知っているディズニーの『眠れる森の美女』：“Sleeping Beauty” (以下『SB』) に登場するマレフィセントにスポットを当て、彼女がどのような人生を送ってきたか、なぜオーロラ姫に呪いをかけなければならなかったのか、など『SB』では語られることのなかった部分が描かれる。今回私は『眠れる森の美女』と『マレフィセント』の違いを考察しつつ、“True Love Kiss”の秘密を紐解いていきたい。(今回のこのレポートではネタバレ的な要素を含みますので、劇場で観るのを楽しみになさっていたら申し訳ありません。)

私は映画を観に行く前に橋本賢二先生の授業で『眠れる森の美女』を観ていたので、マレフィセントは悪の魔女だとばかり思っていた。しかし、彼女は自然の豊かな国の妖精だったのだ。私はまずこの事実には驚いた。幼きころに彼女は隣国の少年(ステファン)と出会い、二人は恋に落ちる。しかし、その関係も長くは続かず少年はいつしかマレフィセントの前から姿を消してしまう。やがて時は過ぎ、元々敵対していた二つの国は戦争を始めるが成長して最強の妖精となったマレフィセントの前に人間たちは全く歯が立たない。そこで王はマレフィセントを討ち取った者を次の王にするといい、王への野心を燃やすステファンはマレフィセントに再び近づき彼女が油断した隙に翼を引きちぎって持って帰る。そうして彼は王になるのだが、一方でマレフィセントは翼を盗られた喪失感と裏切られたショックで悲しみに明け暮れていた。そんなとき人間に殺されそうになっている一羽のカラスを助け、自分の翼になるよう命じる。そうこのカラスこそが彼女に生涯仕えるディアヴァルである。ここまでは、『SB』では描かれることのなかったマレフィセントの過去のストーリーとなっている。

ここからはおなじみのストーリーへと展開していくのだが、オーロラ姫が生まれたことを知った彼女は城へと出向き、16歳の誕生日の日没までに彼女が糸車に指を刺され死の眠りにつくという呪いをかける。そしてその呪いは“True Love Kiss”でのみ解くことができると。しかし彼女は過去に裏切られた経験から真実の愛などないと考えていたため、この呪いは絶対に解けないものであった。この点が『SB』とは違う点である。『SB』では死の眠りにつくという呪いをメリーウェザーが、その眠りは愛する者のキスで目覚めると緩和する。

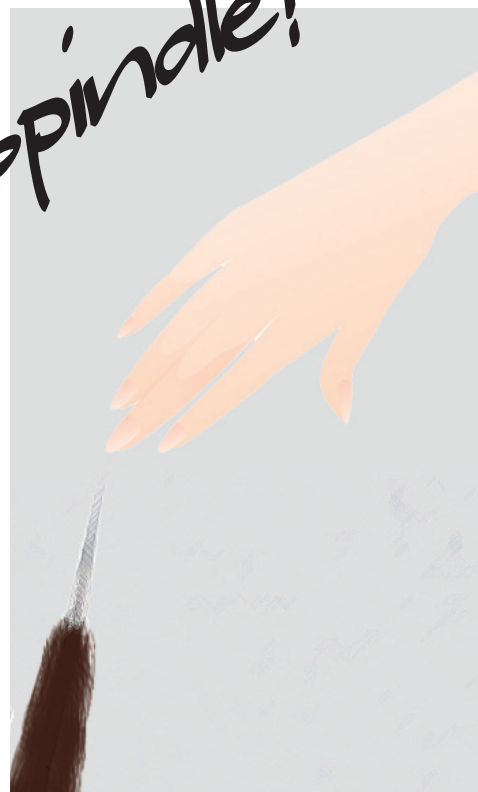
マレフィセントの目を恐れたステファンはオーロラ姫を三人に妖精に託し森の奥で住ませる。『SB』では三人の妖精が仲睦まじくオーロラを育てていたが、『マレフィセント』では、この妖精たちは全く子育てができず、それを見かねたマレフィセントとディアヴァルが陰ながらオーロラを育てるというストーリーになっていた。やがて成長したオーロラはマレフィセントをフェアリーゴッドマザーとして慕うようになる。マレフィセントは呪いをかけたことを悔やみ何度も解除しようとするが失敗する。なぜならこの呪いは永遠に解けるものではなく“True Love Kiss”でのみ解除できるからだ。やがてオーロラは16歳の誕生日に城へ戻ってしまい呪いが発動し永遠の眠りについてしまう。ここからが最も『SB』と違う点である。『マレフィセント』ではフィリップ王子のキスで目覚めるといふ誰しもが知っている展開が覆るのである。フィリップ王子がキスをしてオーロラは目覚めることはなく、やはり真実の愛など存在しないとマレフィセントは諦める。ただ最後に、眠っているオー

ローラを一生守り続けると誓い、彼女にそっとキスをする。すると、オーローラが目を覚まし、「フェアリーゴッドマザー、、、」とマレフィセントに呼びかけるのだ。

たしかに真実の愛は存在した。マレフィセントが送ったオーローラへのキスこそが”True Love Kiss”だったのだ。私はこの展開に本当に心から感動してしまい、映画館で思わず涙してしまった。それくらい二人の真実の愛に胸を打たれた。その後のストーリーは簡単に予想できると思うので、ここで言及はしないが、作品の最後に「このストーリーはおなじみの物語とはちょっと違ったでしょ？でも本当の話。だって語っている私がオーローラ姫なんだから。」とオーローラのモノログがあった。つまり、この『マレフィセント』こそ真の『眠れる森の美女』ということなのではないだろうか。 ”ディズニーが送る最大の秘密” という商売文句に恥じぬ衝撃的な作品であったと思う。個人的にディアヴァルを演じていた俳優がこの作品では良い味を出していると感じた。他の作品では見たことのない俳優なのでこれからの活躍に大いに期待だ。久々にこんなにも充実した作品に出会うことができた。CGの美しさ、ストーリーの深み、そして何よりアンジェリーナ・ジョリーの演技力。彼女以外にこの役を演じきれぬ女優はいないと思う。彼女はこの作品で引退を示唆していたそうだが、引退作としても十分な作品だと思う。できれば引退はしてほしくないが。

『マレフィセント』だけ観ても十分に楽しめる内容になっているが私は『眠れる森の美女』を観ておくことをおススメしたい。そうすれば一度で二度おいしい感覚を味わうことができるはずだ。

Touch the spindle!



『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』

～悪者にされた正義たち～

田中 利枝（たなか・としえ）

今回、映画についてレポートを書くことになって、何について書こうか考えていたところ家にあるハリー・ポッターシリーズの中で目についたこの第5作目の映画について書くことを決めました。

私はハリー・ポッターのシリーズを全て観たが、作品全てを通してわかることの一つとして明らかなキャストの成長具合がある。特にハーマイオニー・グレンジャー役のエマ・ワトソンはシリーズを重ねるごとにかわいい少女から美しい女性へと変化している。一方でハリー・ポッター役のダニエル・ラドクリフは一作目・賢者の石の時はとてもかわいかったのに…とってしまうような成長ぶりになってしまった。（個人的に残念。）しかし、ドラコ・マルフォイ役のトム・フェルトンは主人公の敵役なのだが、どこか憎めないという絶妙な役柄にぴったりな成長ぶりであると個人的には思う。（トム・フェルトンが好きということもあるのだが…）

映画の話に入るのだが、まずサブタイトルにあるようにこの話の中ではハリー・ポッターが前作でのヴォルデモート卿の復活を主張するのだが、それを認めたくない魔法省の人間はハリーとhogwarts魔法魔術学校の校長であるアルバス・ダンブルドアが虚言しているとメディアで伝えた。現実から目をそむけ、悪と戦おうとしている正義を悪者扱いするというなんとも言えない幕開けである。そのためハリーは世間、魔法省、友人などから疑いの目をかけられる。そして悪に対抗する術を学ぶ「闇の魔術の防衛術」の授業では、魔法省から送り込まれたドローレス・アンブリッジに悪に対抗する軍団を作らせないようにと呪文を使う授業を廃止されてしまった。もう自分の身は自分で守るしかない、そう思ったハリーたちは彼を筆頭に生徒たちで「ダンブルドア軍団」を結成し、自分たちで悪と戦う術を身につけるのであった。ここからまた話はいろいろ複雑になっていくのだが、ストーリーはこの辺にしておこうと思う。

私が今回、ハリー・ポッターの映画を選んだ理由は単純に好きだという理由もあるが、この映画は七作品（最後の話は上下と分かれるので正確には八作品）と長い期間に渡りシリーズが続いているのだが、話が非常によくできている。第一話に出てきた些細なことが最後の話できいてきたりなど、シリーズ物として素晴らしい内容だと思う。映画も話がおもしろくなればなるほど、前回作品を上回るものを作らなければならないというプレッシャーがあると思うのだが、飽きることなく毎回楽しめる。また、私が思うに、ハリー・ポッターシリーズの魅力は何度も観てわかるものだと思う。初めて見る人でも十分楽しむことはできると思うし、前作とのつながりも感じられると思う。しかし、セットや衣装の細部のこだわりや、二回目、三回目だから気づく物語としてのキーポイントに気づくこともあるので何度も観ることを私はお勧めしたい。二回目、三回目となるとさすがに内容も覚えるしクライマックスがどうなるかも分かっているのだが、分かっているのにやはりはらはらしてしまう。驚いてしまうようなシーンが来るとわかっているのに驚いてしまう。これもこの映画の好きどころである。ハラハラ、ドキドキ。それが楽しめるのがこの映画である。今回の作品では素晴らしい正義のキャラクターが悪者によって殺されてしまう。殺されるとわかっていても、悲しい気持ちになり悪役のキャラクターを憎く思ってしまう。これは出演している俳優・女優の演技のハイレベルさも関わってくると思う。

今回で久しぶりにハリー・ポッターシリーズを見たが、またもう一度初めからシリーズを見返してみようと思いました。また今ユニバーサル・スタジオ・ジャパンでやっているhogwarts城や作中に出てくる街並を再現したテーマパーク「ウィザーディング・ワールド・オブ・ハリー・ポッター」にも是非足を運んで、ハリー・ポッターの世界に入りたいなと思います。

『アナと雪の女王』

～ありのままの鑑賞記録かくのよ～

岡村 真奈美 (おかむら・まなみ)

2014年3月14日、街はカップルで溢れるホワイトデー。私たちは独り身の女4人で前日の夜からお泊りパーティーをしていた。当初は朝解散の予定だったのだが、なにせ私たち4人全員がホワイトデーに予定がなかったため、急遽その日に公開が開始された『アナと雪の女王』を観に行くことにした。この『アナと雪の女王』は、日本で公開される前からメディアやインターネットの動画サイトで配信されていたテーマ曲が話題となり、大注目されていた作品である。

映画館に向かうと、さすが公開初日、館内は人で溢れていた。特にちびっこ、カップル、そしてJKが多く見受けられた。いまだきの女の子はみんな、プリンセスに目がないのである。そんなキャピキャピした雰囲気の中、ハタチをとうに超えた、しかも徹夜明けの女4人は、少し場違いに感じたのであった。さっそくチケットを買うと、4連の空席がなく、3人と1人で分かれる事になってしまった。さらに不運なことに私がジャンケンで負けて、2組のカップルに挟まれて鑑賞することになってしまった。普段ひとりで映画を観に行くことはあるが、なにが悲しくてホワイトデーに女ひとりでレリゴーしなければならないのか。

そんなことを考えているうちに映画が始まった。公開前から音楽は聴いていたので、率直な感想は「あ、この曲知ってる！松たかこ歌うまいなー」というもので、JKのような「アナかわいい♡ちょう感動♡」という感想を抱くほど心が若くないのだなと感じた。ただ、私のなかで一番のカワイイポイントは、劇中でアナが凍ってしまうというピンチの時、静まりかえった映画館でちびっこが「アナかわいいそう～」と泣き出したことだ。あのちびっこの声のおかげで、冷ついていた私の心が一気にぬくもりを取り戻したのである。



The Little Mermaid

—おてんば娘の大冒険—

井上 真貴 (いのうえ・まき)

7月15日、レポート提出の締め切りも間近となった日に、私はレポートの題材にするDVDを借りるべくゲオ香芝店に向かった。見たいDVDは決まっていた。『**The Little Mermaid**』。授業で『シンデレラ』、『眠れる森の美女』と見てきたディズニープリンセスシリーズの1作品である。だがしかしゲオ香芝店の『**The Little Mermaid**』はすべて貸出し中だった。ついでにもう一度見たいと思っていた『シンデレラⅢ』も貸出し中だったのでこの日は諦めることにした。

そして明るく7月16日、私は灼熱の中原付に乗ること25分、あのどんな映画も揃うとおきの場所に一人で来た。大阪教育大学の図書館。案の定、私の見たかった念願のものを見ることができた。冷房もかかっているし、お金もかからないし、レンタルして暑い中見ることを考えれば、この選択は正しかった。何なら、見終わるとすぐに快適空間の図書館のパソコンで作成することができる。

前置きが長くなったが、『**The Little Mermaid**』について。私が見たものは2006年度盤で、少し修復がなされていたようだが、それでも『シンデレラⅢ』と比べるとやはり時代を感じた。またアリエルは16歳ということも今回初めて知って驚いたが、昔の王子様お姫様が若くして結婚したりしていることを考えると納得。そしてここにも時代を感じた。

『**The Little Mermaid**』は『シンデレラ』や『眠れる森の美女』と比べるとコミカルで賑やかな印象を持った。主人公のプリンセスも、他がおしとやかなのに比べると、アリエルは元気、元気、元気で行動力抜群のタフなお姫様。この作品でも恒例の魔法を使うキャラクターは登場したが、今回はそれが悪役のアースラ。このアースラのデザインが私にとっては絶妙。太いおばさんで、下半身はアリエルのように人魚ならぬタコ。足がにょろにょろしていて全身が紫で、まさにどこからどう見てもいじわるな悪役。こういうおばさんいそういそう！と思った。少し調べてみると、実はアースラ、もともとはカサゴでデザインされていたらしいがそれはちょっとグロテスクで怖すぎた。逆に他の作品と共通していると思ったのが、主人公のプリンセス以外はかわいくない点。この作品でもアリエルの姉妹がたくさん出てきたが、どこか抜けているまぬけな感じがする。それでもアナスタシアとドリゼラの不細工加減には及ばないが。そして主人公のプリンセスには人間の友達がいないこと。いるのかもしれないけど、いつも助けてくれるのは動物。『**The Little Mermaid**』ではフランダーとセバスチャンとスカットル。このゆかいな仲間たちがかわいくて、笑いを与えてくれる。セバスチャンが花火を見て、「空飛ぶクラゲだ！」なんて言っちゃうのを見ていると、微笑ましくてにやにやしてしまう。図書館のブースで一人でにやにやしながら見ているから、だいぶ恥ずかしいけど。こんな場面がいっぱいあるから困っちゃう。『**The Little Mermaid**』では海の中の背景がどれも凝ったデザインで、海の仲間たちが楽器を演奏したりしている何気ないシーンがちょっとした笑いで構成されているので、一瞬も退屈することがない。私にはこれがかわいくて仕方がない。また、アースラについては特に思ったのだが、キャラクターのデザインが素晴らしい。陽気なおしゃべりのカモメだったり、悪役の双子のウツボだったり、動物のイメージとキャラクターがしっくりくる。そこがよりわたしの気持ちをかきたてるのだ。

シンデレラ同様に、リトルマーメイドもⅢまでであるようなので、ぜひ見てみようと思っている。

私とトトロとアリエルと

伊藤 綾香 (いとう・あやか)

家で商いをしているということもあって、家で弟と二人留守を任されていた幼い私にとって、アニメのVHSテープというのは心強い味方であった。弟を寝かしつけた後、お母さんが学生時代に撮りためていた『セーラームーン』や昔流行ったアニメを何度も見返しながら、両親の帰りを待ったことは、大きくなった今でも鮮明に記憶に残っている。その中でお気に入りだったのが、スタジオジブリの名作『となりのトトロ』と、こちらもディズニーの名作『リトル・マーメイド』である。トトロの方は、その主題歌で歌われている「子供のときにだけあなたに訪れる素敵な出会い」という歌詞に惹かれ、よく祖父を引きずりまわして近くの雑木林へトトロを探しにいたり、はたまたアリエルになったつもりでフォークで髪を梳いて怒られたりと、両作品ともに私の幼少期に多大な影響をもたらした作品である。このようにして、私の寂しさを埋めるために側に居てくれた二つの作品をまた最近になって見る機会があったので、これらについてレポートを書こうと思った次第である。

先に2つの作品をあげたが、私は特にどちらが優れていると優劣をつけるつもりはない。特に、私が今回注目したいのは両作品を見た後に私の中に残る何とも名状し難い余韻のようなものである。今になってみても、どちらも独特の後味を持つすばらしい作品であると思う。

トトロの方は、なんとなく田舎に帰った時のような、お盆の時期に帰るおばあちゃんの家の香りのような、古き良き日本の良さが前面に押し出されており、見た後にはじわりと胸を温める感動と、しかしどこかもう戻れない昔への寂寞とっていいのか、ノスタルジーのようなものがないまぜになって、何ともいえない気分になる。昔はただわけもわからず見ていた作品だったが、僅かながらも成長した今改めて見返すと、何事にも意欲的に取り組み、好奇心で溢れていた幼少期を思い出し、なんとなく年をとったなあと感じさせられた。ジブリには他にも、『耳をすませば』や『崖の上のポニョ』といったような、少し前の日本によく似た世界観で展開されるストーリーが多く存在する。日本といえば「ジブリ」というのは、やはりこの感覚が日本人のノスタルジーをくすぐり、惹きつけて離さないからであろう。

対して『リトル・マーメイド』の方は、ただただ幸せだけが残るすっきりした余韻である。先ほどのジブリに対して、ディズニーというのは概してこのような後味を残すことが多いように感じる。それは単純に自分の全く知らない空想とわかりきった世界で起こる出来事であるからなのか、理由はなぜか分からないが、初めて見たあの時と、最近になって見た時の感想や感じたことに、さして違いないように感じた。それが、逆にディズニーのすごいところなのである。年齢に関係なく、いつても自分がおとぎの国のお姫様になれるのである。ジブリが「昔を懐かしめる」アニメなら、ディズニーは「昔に戻れる」アニメなのだと、身をもって実感した。

主人公はあなたです。～『LIFE!』をみて～

原 里衣菜 (はら・りいな)

バイト終わりのある春の夜。スマホのゲーム中に電話が鳴った。遊ぶ約束をしていた友達からだ。

もしもし、何？

見たい映画あるんやけど見に行かん？

何？

ライフってやつ

どんなん？

おもしろいって

はい。じゃ〇〇着いたら連絡しませう。

電話を切って画面を見ると、“GAME OVER”とゲームキャラクターが泣いていた。そんなわけで少しいらいらしながら友達と会う。どんな映画なのか全く分からなかったため聞いてみても、観てないから自分にも分らないと。そりゃそうだと思いながらさらにいらいら。友達にご機嫌でポップコーンとジュースを買ってスタンバイオッケー。そのポップコーンをちよつとつまんで、機嫌が戻った。

ライフ… どんな映画だろうか。自然の物語？SFやアクション系ではなさそうだ。

そんなことを思いながら、予告を見ていた。映画が始まると、テンションが上がった。

この人！見たことある！！！！誰だっけ、あ、ナイトミュージアムの人！！！！

主人公演じるベン・スティラー（この時は名前を思い出せなかった）を見て、知っている俳優だったため映画に興味湧いてきた。一気に作品に溶け込める。見る限り、冴えないパツとしない素朴なサラリーマン。現実では地味マンな彼は、自分の頭の中の世界では、スーパーマンなのかというくらいかっこいいしかしそれは空想だ。

なんか親近感。私も冴えない人間だもんなあ。

空想では、すきな女性をおしゃれに口説ける。現実には、声もかけられない。空想癖を会社の人に馬鹿にされる。主人公の仕事は写真の現像。暗い部屋で同僚と二人で仕事だ。これまた地味ポイント追加。

ストーリーは、出版廃止が決まった雑誌『LIFE』の最終刊の表紙のネガがなく、主人公はそのネガを探しまわるといふものだ。写真を撮ってくれた写真家を探す。地味な主人公がさまざまな冒険をする。危険が目の前になると、躊躇してしまう主人公。そういう時は空想が彼の背中を押してくれる。絵が動いたり、憧れの彼女が励ましてくれたり（空想です）。酔っ払い野郎の運転するヘリに乗ってそこから、海に飛び降りたり、言葉の通じない土地で、自転車やスケボーで走り回ったり、火山の噴火に巻き込まれそうになったり… その冒険の中でいろんな人に出会っているのも印象的。しかもみんなけっこう普通じゃなかったり（笑）憧れていた彼女とも話すことができたり、彼女の子供にスケボーを教えてあげて仲よくなったりと、恋のほうでも成長が見られた。しかし、写真家を見つけることはできずにいた。新しくきた（憎たらしい）上司にも怒られ、さらに冒険を続ける。写真

家が登山中だと聞き、主人公も登山する。そこでようやく写真家を見つけた。よかったねと思った矢先、ネガは主人公に渡したと、一緒に送った財布にネガを入れといたよ、サプライズ☆ ってな感じ。主人公その財布どうしてたと思う？ イラついて捨ててたんだよ。

何やってんだあ！！！！あの冒険なんだったの？命がけの冒険の意味なしやん！！

絶望の主人公（私も）。ここで朗報だ。主人公の母が財布をひろってくれていた。せっかくもらったものを捨てるものではないと言って。ネガを渡しても、雑誌は廃刊なので職を失った主人公。あんだけ探しまくった表紙用の写真を主人公は確認せずに渡したため、出版された雑誌を買いに行く。隣には例の彼女。

恋愛がうまく行ってよかったね。んで、写真はなんだろう。

写真には、工作中的の主人公の写真だった。写真家が最高傑作だと言って渡した写真が主人公の写真だったとは。写真家は、主人公がただの地味な空想マンではないってわかってたのかな。そして、この会社のスローガンが心に響く。

To see the world,
Things dangerous to come to,
To see behind walls,
To draw closer,
To find each other and to feel.
That is the purpose of life.

世界を見よう 危険でも立ち向かおう
壁の裏側を覗こう もっと近づこう
もっとお互いを知ろう そして感じよう
それが人生の目的だから

初めは空想でしか冒険できずにいた主人公。彼が本当の命がけの冒険をして、いろんな世界を見て感じて、たくさんの経験をした。これからも本当の人生を（空想もたまにはありだけどね）、最高のパートナーと送っていくことができるんだろうな、いい話！！！！

映画が終わって、友だちと二人、うちらも空想から初めてみる？なんて冗談言いながら、ご機嫌で家に帰った。主人公は自分自身、そんなライフを送っていかう。

